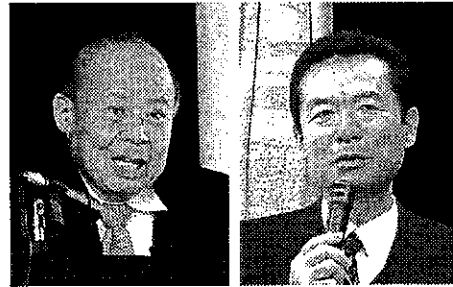


「風土が語る災害の宿命」で講演会

整備局河川部

近畿地方整備局河川部は22日、「風土が語る災害の宿命」に関する講演会を大阪市中央区の大阪合同庁舎第1号館で開いた。竹林征三富士常葉大名誉教授が「風土に刻まれた災害の記憶・防災を考える」近畿は災害と防災のルーツの地」をテーマに3部構成で講演した。官公庁や民間企業から100人を超す参加者が集まった。

冒頭、主催者を代表して小俣篤河川部長は「台風18号では河川を治める難しさを改めて認識するとともに、近畿の奥深い治水の歴史を感じた。昨年は竹林名誉教授に大和川について講演していただいたが、今回は近畿全体についての話をつかがう。今後の災害や防災を考える機会にしてほ



竹林名誉教授

小俣部長

しい」とあいさつした。

竹林名誉教授は「いずれ壊される景観は10年、壊されずに残る風景は100年、人々の心象に定着する風土は1000年ということを考える」と、昨今の景観設計という考えには違和感を覚える」と話を切り出した。第1部は巨大災害の世紀に突入、第2部は歴史が語る災害の宿命、第3部は風土が語る災害の宿命として、3時間半にわたって講演した。